

ウラッハ、コンツェルトハウス、 ウェストミンスター・レーベル

以前にDialレーベルを紹介した時にも少し触れたように、LP初期のマイナー・レーベルは百花繚乱であり、その演奏の質もメジャー・レーベルに劣らないどころか、むしろ、より名演と呼んでもよいものが数多くありました。

わが国の室内楽ファンにとって忘れられないマイナー・レーベルの一つがWestminsterレーベルです。レオポルド・ウラッハとウィーン・コンツェルトハウス四重奏団による、モーツァルトのクラリネット五重奏曲は、文字通り不滅の名演であり、人それぞれの評価は別としても、聴いたことの無いクラシック・ファンはほとんどいないのではないのでしょうか。

また、コンツェルトハウス四重奏団の後輩に当たる、バリリ四重奏団によるベートーヴェンやモーツァルトの四重奏曲全集も、多くのファンを獲得してきたモノラル期の名演の一つです。

ところで、バリリがコンツェルトハウスの後輩と書きましたが、この辺りの事情は少し複雑です。確かにバリリはコンツェルトハウス四重奏団のカンパーよりも年少でしたが、バリリはウィーン・フィルのコンサート・マスターであったのに対し、カンパーは、戦後までウィーン・フィルのメンバーでもなく、戦後の人員不足によって、ウィーン・フィルに入ったと言ってもよいのです。言ってみればバリリ四重奏団は「主流派」であり、そのメンバーも、前任者であったシュナイダーハン四重奏団のメンバーと全く同じなのです。このような事情は、それぞれの四重奏団の演奏の価値には全く関係の無いことですが。

1949年、アメリカに創設されたWestminsterレーベルは、ヨーロッパに強い繋がりを持ち、戦争によって疲弊し、物資が不足していたヨーロッパに強いドルを持って乗り込み、短期間の間に膨大な録音を成し遂げます。

最近、再発売されたCDのライナーノートや当時の証言を集めた本、『ウィーン・フィルハーモニー —— その栄光と激動の日々』などによって、当時の状況がかなり詳しく分かるようになってきました。それらによれば、録音は夜遅く、仕事を終えた後に寒いスタジオで行われたであるとか、貰った報酬はわずかなもので、時には現物支給であったり、支払われないこ



ともあったのだとか、演奏家達にはレコードで聴く演奏からは伺い知ることのできない苦勞があったようです。

このような証言を辿ってみると、Westminsterレーベルというのは、随分と「けしからん奴ら」ということになります。たしかに、バリリやカンパーは、半ば騙されたように思ったり、腹立たしく思ったこともあったことでしょう。しかし、遠く離れた極東の地で今に到るまで愛好され、名演の第一に挙げられ、未だにこのような文章の話題となっているのは、まさにその「けしからん奴ら」の録音によってなのです。私たちは、このような録音を残してくれた、この「けしからん奴ら」に心から感謝しなければならぬのです。

CDの時代になり、特にコンピューター技術の発展によって、LP初期のように多くのマイナーレーベルが出現してきています。このような動きがこの後どのように発展するのか、いろいろと想像を巡らせてしまう今日この頃です。